

## 他者との関わりが図画工作の授業に 与える影響に関する一考察

佐伯 岳春

福山平成大学 福祉健康学部  
(こども学科)

E-mail : sae-take@heisei-u.ac.jp

### 【要旨】

本研究の目的は、学生が同じ空間で他者の存在を感じる事が少なく、他者とイメージや発想を共有することが難しい状況の中、図画工作における表現活動に対する意欲がどのような要因で変容するのかを検証し、今後の図画工作の遠隔授業の展開のための示唆を得ることである。調査は、図画工作Ⅱの受講生を対象に実施し、遠隔授業、対面授業での制作活動に意欲をもって積極的に取り組んだかどうかや作品を作る時に遠隔授業と対面授業ではどちらが作りやすかったかについて質問した。結果は、遠隔授業と対面授業の双方の利点を挙げている学生がおり、それぞれの授業に対して利点を見出し対応している学生がいることが分かった。

キーワード：図画工作，意欲，遠隔授業

## 1. 問題の所在と研究目的

筆者(2017)は、図画工作の授業において、教室という同じ空間で学生が制作したものを交換して作品を作る過程と、学生同士の相互鑑賞によって制作活動に対する意識が前向きになり、表現することへの意欲が向上していることを先行研究で確認している。<sup>1)</sup>この先行研究の対象の学生は、保育者養成課程の学生であったことから、小学校教員養成課程の学生についても同様に、同じ空間の他者の存在やグループワークの機会は、制作活動に対する意欲にも関連しているのではないかと考えた。

2020年、世界はコロナ禍に見舞われ、日本でも密を避けるため、多くの教育機関で遠隔による授業が実施された。制作活動が主として行われる図画工作の授業においても、遠隔授業の実施を余儀なくされ、授業資料の配信によって授業を進めていくことになった。こうした状況のなか、教室という同じ空間で、他者の存在を感じ、何人かで同じ作品を作るというグループワークの機会を創出するのが難しい状況となった。

しかし、小学校学習指導要領「第7節 図画工作 第1目標(3) つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。」<sup>2)</sup>という「学びに向かう力・人間性等」を培う目標に対して、同じ空間で一緒に作るという活動は、表現に対する意欲に効果があるのだろうか。

田原ら(2014)は、自己肯定感の育成を目的として協同制作活動を取り入れた実践を行った。結果は、協同制作が自己肯定感を育成のための有効な手立てであることを示すには至らなかったが、協同制作は学級の雰囲気をもっとよくするのに有効な手立てであることが示された。<sup>3)</sup>

また、波多野(2015)は、造形あそびと立体造形を連動させることによる子ども達のイメージ形成のありようについて調査した。その結果、グループで行った造形あそびの様々な行為が子どもの立体造形のイメージ形成を促進する傾向があることを明らかにしている。<sup>4)</sup>

以上の先行研究から、同じ作品を何人かで協同して一緒に作るということは、クラスの雰囲気が良くなり子どものイメージ形成を促進するなど、感性を育み楽しく豊かな生活を、他者と同じ空間で、学びに向かう力となる制作への意欲を育成していることを示している。

では、本研究の対象となる学生の造形的な表現の制作活動に対する意欲は、どのような要因で変容するのだろうか。

降旗(2015)は、図画工作及び美術への「意欲」と「苦手意識」について大学生と小学生・中学生の実態を調査すると共にその原因を考察している。その中で、図画工作や美術に対しての「苦手意識」の変化が、小学校の段階では2割未満と少ないが、中学生になると5割になり、大学生になると6割近くになることが分かった。また、図画工作や美術に対してあまり「意欲」をもって取り組めない児童・生徒は、ほぼ図画工作や美術に対して何らかの「苦手意識」を抱いていることを明らかにしている。その「苦手意識」を抱いた理由として「人と比べてしまうから」というものがあり、「苦手意識」は、単に個人の問題ではなく、人との関係の中で「苦手意識」を生み出してしまう状況や環境があって、「苦手意識」を助長してしまうと推察している。そのため、「意欲」と「苦手意識」について集団としての人的環境も重要な要因とみている。また、学生に身につけてしまった「苦手意識」や「不得意意識」をなくするのが難しいとしながらも、なくすためには、授業の導入段階においてみんなで話し合い、一人一人の子どもや学生が豊かにイメージや発想が膨らむような充実した時間の確保の必要性を訴えている。<sup>5)</sup>

以上の先行研究から、本研究は、コロナ禍により、同じ空間で学生が他者の存在を感じる事が少なく、他者とイメージや発想を共有することが難しい状況の中、表現活動に対する意欲がどのような要因で変容するのかを検証し、今後の図画工作の遠隔授業の展開のための示唆を得ることを目的とする。

## 2. 調査対象・調査方法

### (1) 調査対象

対象：FH大学 FK学部 K学科 小学校教員志望の3・4年生 10名

対象とした授業：「図画工作Ⅱ」2020年 前期科目 15回の授業のうち前半6回が授業資料配信による遠隔授業で、他9回は、対面授業として実施した。

### (2) 調査方法

質問紙による調査を全15回の授業終了後に実施した。

実施の際に、研究倫理面への配慮として、質問紙への回答は自由意志であることや回答の結果が成績に影響がないことを説明し、対象者から了承を得た。

質問紙の内容として、設問1は、授業での制作活動に対して意欲をもって積極的に取り組んだかどうかを5件

法で質問した。設問2として積極的（消極的）な取り組みだった理由を5つ挙げ（複数選択可）詳しい理由も自由に記述させた。また、作品を作る時に遠隔授業と対面授業ではどちらが作りやすかったかについて自由に記述させた。

（質問紙の内容）

設問1：授業への取り組みは積極的だったか消極的だったか？

1. 消極的だった。2. どちらかという消極的だった。3. どちらでもない。4. どちらかという積極的だった。5. 積極的だった。

設問2：授業へ積極的（消極的）な取り組みだった理由を下記の中から選んでください。（複数選択可）また、詳しい理由を記述してください。

- ① 授業内容
- ② 授業時間
- ③ 材料等
- ④ 他の学生が存在
- ⑤ その他の理由

上記の選択肢を設定した理由として、②授業時間に関しては、遠隔授業の場合は、授業資料の配信から一週間程度課題に取り組む時間を設定しており、好きな時間に取り組むことができる。それに対して対面授業の場合は、時間割に沿った授業時間になるため、それが授業に対して意欲的になるかならないかの要因になる時なども含む。また、③材料等としている選択肢については、材料そのものを扱うにあたって、あまり扱いたくないもの（粘土などの感触が嫌い）などの理由や、遠隔授業の際、自宅に描画のための材料や工作の材料が無く、材料の準備などで意欲を喪失した場合なども含まれている。④他の学生が存在は、遠隔授業として一人で制作した場合と、対面になり他の学生が存在を同じ教室という空間で感じながら制作した場合に、それが授業に向かう意欲に関係していたかどうかを考え選択肢として選ぶよう補足説明を行った。

設問3：相対的にみて遠隔授業と対面授業では、作品を作る時にどちらが作りやすかったですか？

どちらかの授業を選び、その理由を自由に記述させた以上の内容で質問紙による調査を実施した。

### 3. 結果及び考察

設問1の授業への取り組みは、積極的だったか消極的だったかについては、積極的だったが「5」、消極的だっ

たが「1」として平均値を算出した。平均値は、遠隔授業（3.74）、対面授業（4.00）という値となり、全体的に、対面授業のほうが、遠隔授業より若干積極的に授業に取り組んだと思われる。また、全体的にもどちらかという積極的に授業に取り組んだと思われ、遠隔授業による学びに向かう力への影響は少ないと思われる。

では、授業へ取り組む際の意欲は、どのような要因から考えられるだろうか。設問1と設問2によるアンケートをもとにクロス集計した。遠隔授業(図1)、対面授業(図2)の結果は以下ようになった。



図1 遠隔授業に対する意欲の要因との相関

遠隔授業では、授業に取り組む意欲として「どちらでもない」が最も多かった。その要因は、③材料等の準備に関することが多く、学生の回答には、「高校の頃の絵の具が見つからなかったので急遽100均で調達した。」「材料をそろえるのが大変」「カッターで切る時に下に置く、段ボールを探すのが大変だった。」など、作品を作るための材料の確保に手間取り、意欲はあったがそれがれてしまい「どちらでもない」となってしまったとも考えられる。遠隔授業の課題については、授業担当教員も自宅で製作し、できるだけ材料に困らないような題材を設定したつもりだった。しかし、これまでの図画工作や美術で使ってきた水彩絵の具などが自宅に残されておらず、よく使う描画材料などを備えていない学生が多くいることが分かった。

また、遠隔授業に取り組む意欲に影響した要因として最も多かったのは、①授業内容だった。積極的に取り組んだとして挙げられた回答は、「久々に絵を描いたので楽しかった。」「きれいなのができたときの感動がとてもすごかった。」など、学生によって造形的な表現方法の好みや自分自身の感性を確認しながら取り組んでいたことが分かる。また、消極的な取り組みになった理由として挙げられた回答は、「どんなふうで作ったらいいのか

分からなく、とりあえず、さかさにのりで貼った。」「ファイルがエクセルだったので、文章が打ちづらかった。」など、作品のイメージ形成がうまくいかなかったことや、パソコンを使ったデータでの提出に戸惑ったことなどで意欲がそがれてしまった様子が挙げられていた。

とくに、遠隔授業への取り組みとして特徴的だった回答は、②授業時間であり「時間がいっぱいあって絵を納得いくまで描けた。」「提出期限までに提出することができた。」という回答だった。遠隔授業への取り組む意欲への影響として、時間に関する回答がもっと多く出るものと予想していたが、回答数は2つであり、自粛期間の遠隔授業時に、時間に関する意識をもって授業に取り組んだ学生が少ないように思われる。

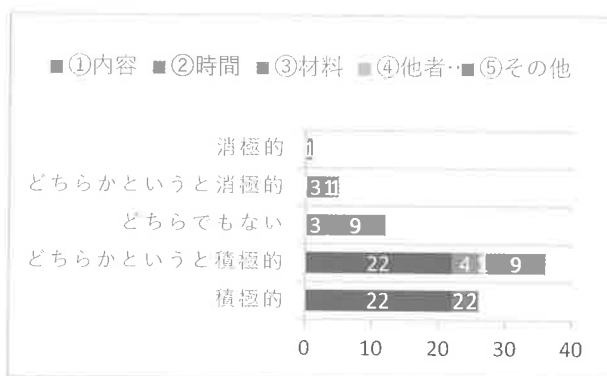


図2 対面授業に対する意欲と要因との相関

対面授業では、授業に取り組む意欲として「どちらかという積極的」が最も多かった。また、対面授業に取り組む意欲に影響した要因としても最も多かったのは、遠隔授業と同様に①授業内容だった。要因として、学生の回答には、「絵を描くのは苦手だったので、写真を見ながらできるだけその人の個性を引き出せるようにした。」「人間の動きを描くのが、最初は難しかったが、だんだん描いていくうちに良い感じに描けた。」「粘土を使って、人を表現することができた。どうやったら立つかなども考え工夫できた。」など、授業に対して真摯に取り組む姿勢について回答したものや、作品のイメージを構想することを楽しく感じた回答などが多かった。短時間に人物を描画するクロッキーをした授業に関して、絵の苦手な学生が、上手く描けたという回答が多かった。その授業は、遠隔授業でも対応できたと思われ、シラバスの授業の構成を変えることなども検討すべきだったことが課題として考えられた。

とくに、対面授業への取り組みとして遠隔授業と対照的だった回答は、②授業時間で、「授業時間に間に合わ

なくて、作るのが大変だったけど楽しかった。」という回答だった。他の回答も同様で、遠隔授業に比べ、制作時間が少ないことを挙げている。

対面授業では、④他者の存在が授業の取り組みへの意欲に影響したことが、一つだけ回答されている。内容は他の学生と作品に対する意見交換を行ったことが良かったという内容であった。こうした回答がもう少し出ることを予想していたが、一つしかなく、対面授業になっても他者の存在が、授業に対する意欲とはあまり関係がないと思われる。また、遠隔授業から対面授業へ変わっていったが、学生同士の距離を取らなくてはならず、作品を学生が一緒になって協同で制作することや、学生が制作したものを交換して一つの作品を作る過程を行うなどの授業内容を実施しなかったことも、他者の存在が授業に取り組む意欲に反映されなかった一因とも考えられるだろう。

設問3「相対的にみて遠隔授業と対面授業では、作品をつくるときにどちらが作りやすかったですか？」という質問に対しては、10名中7名が対面授業を回答し、2名が遠隔授業と回答した。

対面授業を回答した理由としては、「友達の意見も取り入れ、とても良い作品ができたと思う。」という内容で、友人や教員とのコミュニケーションをとることで、作品を作るうえで活かすことができたといった回答を7名中6名がしており、対面授業によって知識や感性、造形的な表現の経験が学生に共有されたことが、この回答の内容から推察される。また、粘土など大学でしか扱えない材料があることや他の材料がそろっていることなども5名が回答しており、図画工作においては、授業で使用する材料が、円滑な表現活動に対して影響が大きいと考えられた。

遠隔授業を選んだ回答は「自分のペースで作ることができたのが良かったです。」といった内容で、作る過程で時間を気にせず出来たことや一人で集中してできたことが、遠隔授業を選択した理由として挙がっている。

1名がどちらも挙げずに「対面授業のほうが準備や片付けがしやすかった。遠隔授業は家にあるいろんな材料が使えた。」と回答したが、他にも2名の学生が遠隔授業、対面授業の双方の利点を挙げており、それぞれの授業に対して利点を見出し対応していることが分かった。

#### 4. 今後の課題

今回の調査から、遠隔授業と対面授業を相対的に考え

て答える設問3の回答で、他者とのコミュニケーションが、授業への取り組みの意欲に影響が大きかったという回答が多く、対面授業の方が作品を作る図画工作の授業に適していたと考えられる学生が多いと推察される。

そのため、今後も遠隔授業が実施される場合は、他者とのコミュニケーションをとりやすい環境づくりが必要ではないだろうか。それには、ただ同時双方型遠隔授業を実施するだけでなく、一つの作品をお互いに意見を交わしながらイメージを共有して制作する協同制作など、現代の多様なデジタル機器やマルチメディアを使った授業展開も検討することが必要ではないかと考えられた。

#### 引用・参考文献

- 1) 佐伯岳春 (2017) 「保育者養成課程における造形表現の授業の一考察」 湊川短期大学紀要 第53集 pp.61 - 68
- 2) 文部科学省 (2017) 「小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 図画工作編」 日本文教出版株式会社 pp.15 - 16
- 3) 田原 智志, 笹山 龍太郎, 小原 達郎 (2014) 「ものづくりを通じた共同学習による自己肯定感の育成～協同制作を取り入れた授業づくりを中心に～」 教育実践総合センター紀要 13 pp.281 - 290
- 4) 波多野 達二 (2015) 「図画工作科における素材・対象との対話とイメージ形成との関係—造形遊びと立体造形を連動させた題材開発と実践—」 佛教大学教育学部学会紀要 第14号 pp.27 - 36
- 5) 降旗 隆 (2014) 「図画工作・美術への[意欲]・[苦手意識]の実態と考察—児童・生徒・大学生への実態調査結果から—」 山形大学紀要 (教育科学) 第16巻 第2号 pp.109 - 123

# A Study on the Influence of the Interaction with Others on Arts and Crafts Classes

Takeharu SAEKI

Department of Childhood Education,  
Faculty of Welfare and Health Science,  
Fukuyama Heisei University

E-mail : sae-take@heisei-u.ac.jp

## Abstract

Students rarely feel the presence of others in the same space. In this study, I inspect the characteristics of the will to participate in an expression activity in an arts and craft class, in a situation in which it is difficult to share an image and an idea with others. The purpose of this study is to determine a suggestion for the development of a future remote arts and crafts class. Attendance of arts and crafts II was raw, and I conducted an investigation, asking whether it was easy to participate in a remote class or a face-to-face class with regard to work that was difficult to produce. The remote class and the face-to-face class reacted positively. Some students found advantages to both formats, and others found advantages in each class and coped with the difficulties.

KEYWORDS : the arts and crafts, motivation, a remote class